

平成21年度第1回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
中央水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2009年8月～12月)のポイント

海況

潮岬以東の黒潮は、期間を通してC型基調で推移する。8～9月には一時的に八丈島の北を通る。沿岸水温は、潮岬以西が「平年並み」～「高め」、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島海域が「平年並み」～「低め」で暖水波及時に「高め」、犬吠埼以北が概ね「平年並み」で推移する。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、高め＝平年値+1.5℃程度、
低め＝平年値-1.5℃程度

漁況(来遊量予測)

マサバ・ゴマサバ太平洋系群

2歳魚は前年を上回る。

全体としては前年を下回る海域が多い。

マアジ太平洋系群

前年を下回る海域が多い。

マイワシ太平洋系群

駿河湾、房総以北では前年を上回る。

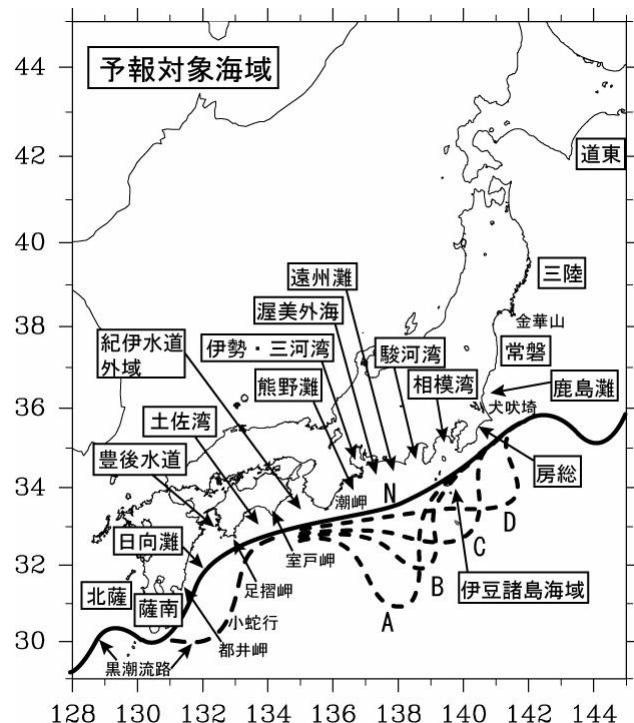
相模湾、伊勢・三河湾以西では前年並～下回る。

カタクチイワシ太平洋系群

1歳魚が主体で総じて不漁の前年を上回る。

ウルメイワシ太平洋系群

前年を上回る。



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：今井、和田、染川

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 中央水産研究所 業務推進部

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://nrifs.fra.affrc.go.jp/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2009年8月～12月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと。）

◎潮岬以西

- ・ 薩南海域の黒潮北縁は、屋久島付近の平均的な位置で推移し、8月と11月に接岸傾向となる。
- ・ 黒潮は、都井岬沖～足摺岬沖では、8～9月及び12月に離岸傾向となる。室戸岬沖～潮岬沖では8～9月は接岸傾向、10月以降は離岸傾向で推移する。

◎潮岬以東

- ・ 黒潮は、期間を通してC型基調で推移する。8～9月には一時的に八丈島の北を通る。
- ・ 野島崎沖の黒潮は、期間を通して接岸からやや離岸傾向で推移する。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・ 潮岬以西では、黒潮の離接岸に伴って沿岸域へ一時的に暖水が波及することがある。
- ・ 潮岬以東では、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島海域は、概ね冷水域に入る。黒潮流路の変動に伴い、内側域への一時的な暖水波及がある。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 親潮系冷水や黒潮系暖水の波及は「平年並み」～「弱め」で推移する。

(4) 沿岸水温

- ・ 潮岬以西は「平年並み」～「高め」で推移する。
- ・ 熊野灘～遠州灘～伊豆諸島海域は、「平年並み」～「低め」で推移する。暖水波及時には「高め」となる。
- ・ 犬吠埼以北は、概ね「平年並み」で推移する。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、

（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上

経過（2009年4月～7月）（注：経過は図2を参照のこと。）

(1) 黒潮

- ・4月上旬までは、C型流路で推移した。
- ・4月中旬、伊豆諸島の東西に冷水域を持つW字状になった。
- ・4月下旬、伊豆諸島東側の冷水域が切離されて、B型流路となった。
- ・5月中旬以降、伊豆諸島に冷水域を持つC型流路で推移している。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・4月、黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置で推移した。
- ・5月、黒潮北縁はやや離岸傾向で推移した。
- ・6月、黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置で推移した。

◎潮岬以西

- ・4～7月、都井岬～室戸岬ではやや離岸傾向で、小冷水渦の東進に伴い離接岸が見られた。
- ・4～5月前半、潮岬ではやや離岸傾向で、小冷水渦の東進に伴い離接岸が見られた。5月後半以降は接岸傾向で推移した。

◎潮岬以東

- ・4月下旬～5月上旬、熊野灘～遠州灘で黒潮内側反流が見られた。
- ・5月中旬～6月、遠州灘に黒潮内側反流から切り離された暖水域が残った。
- ・6月以降、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島海域は概ね冷水域に入った。
- ・房総沖では、黒潮は接岸傾向で推移したが、5月中旬に一時的に離岸した。6月下旬以降は、離岸している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・4月、沿岸域に黒潮系暖水が波及した。
- ・5月、沿岸域には冷水が南下し、沖合域には黒潮系暖水が波及した。両者の間に強い潮目が形成された。
- ・6月、常磐南部海域を中心に混合水が広く分布した。

現況 (2009年7月24日現在)

(1) 黒潮

- ・ C型流路で推移している。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎ 薩南海域

- ・ 黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置にある。

◎ 潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬～足摺岬で「やや離岸」している。
- ・ 黒潮は、室戸岬～潮岬で「接岸」している。

◎ 潮岬以東

- ・ 熊野灘～遠州灘～伊豆諸島海域は概ね冷水域に入っている。
- ・ 房総沖の黒潮は離岸している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 混合水が広く分布している。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に従った。

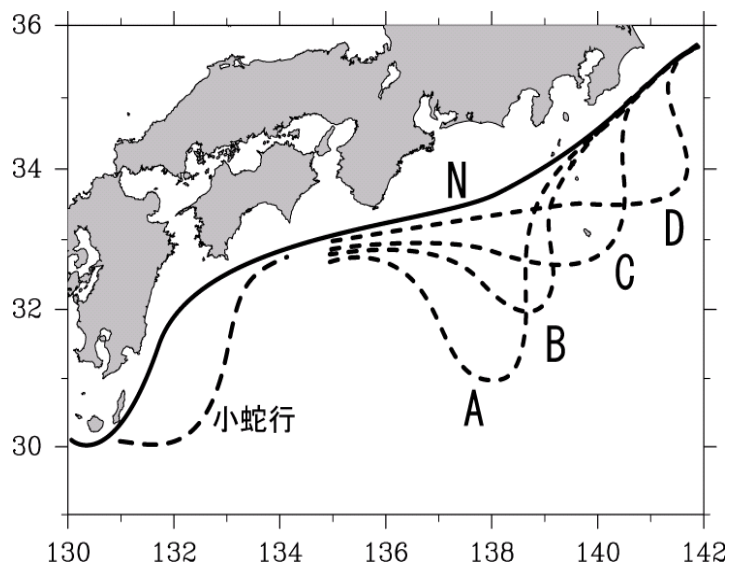


図1 黒潮流型の分類

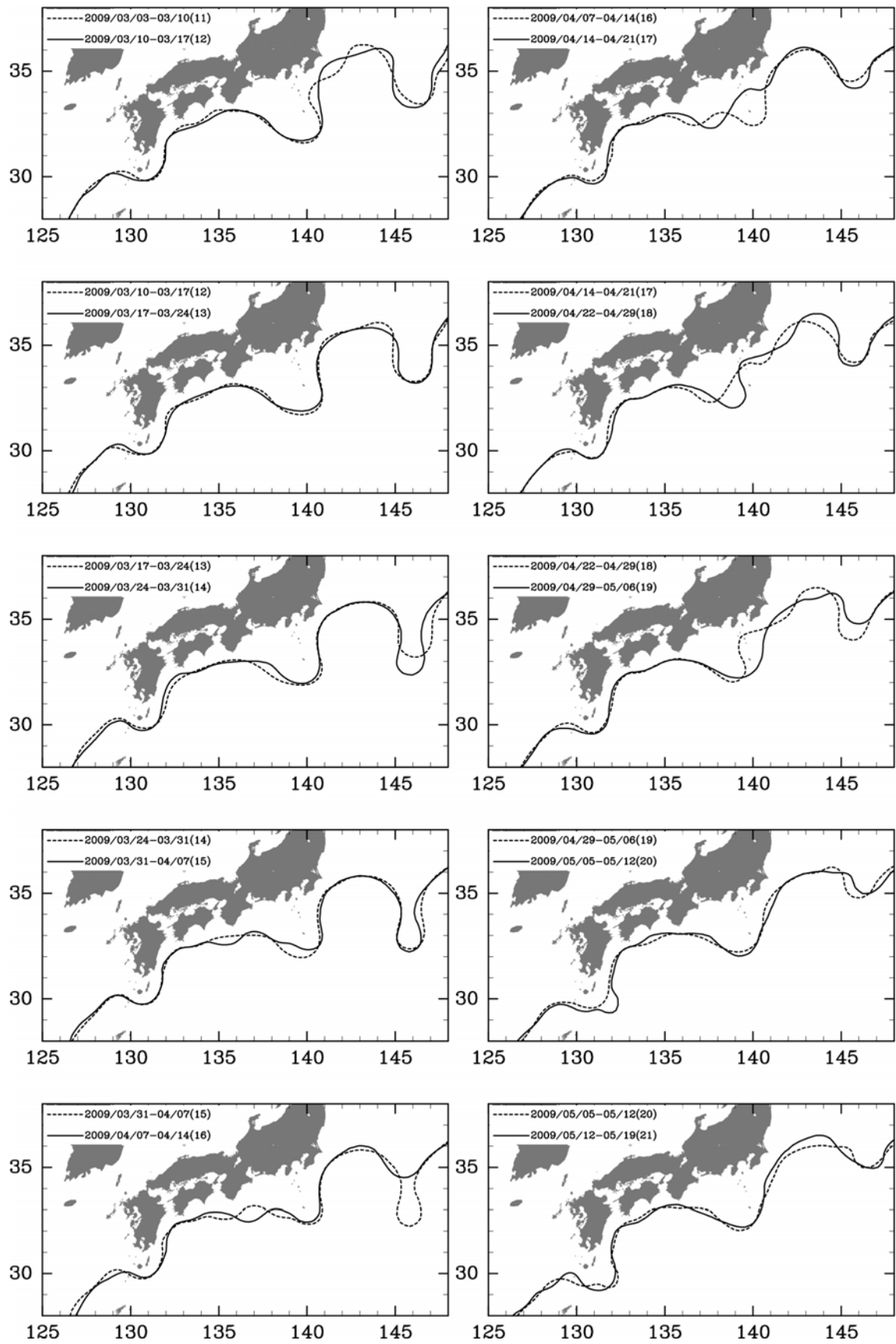


図 2a 黒潮流軸のパターン

(2009年3月~7月, 海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

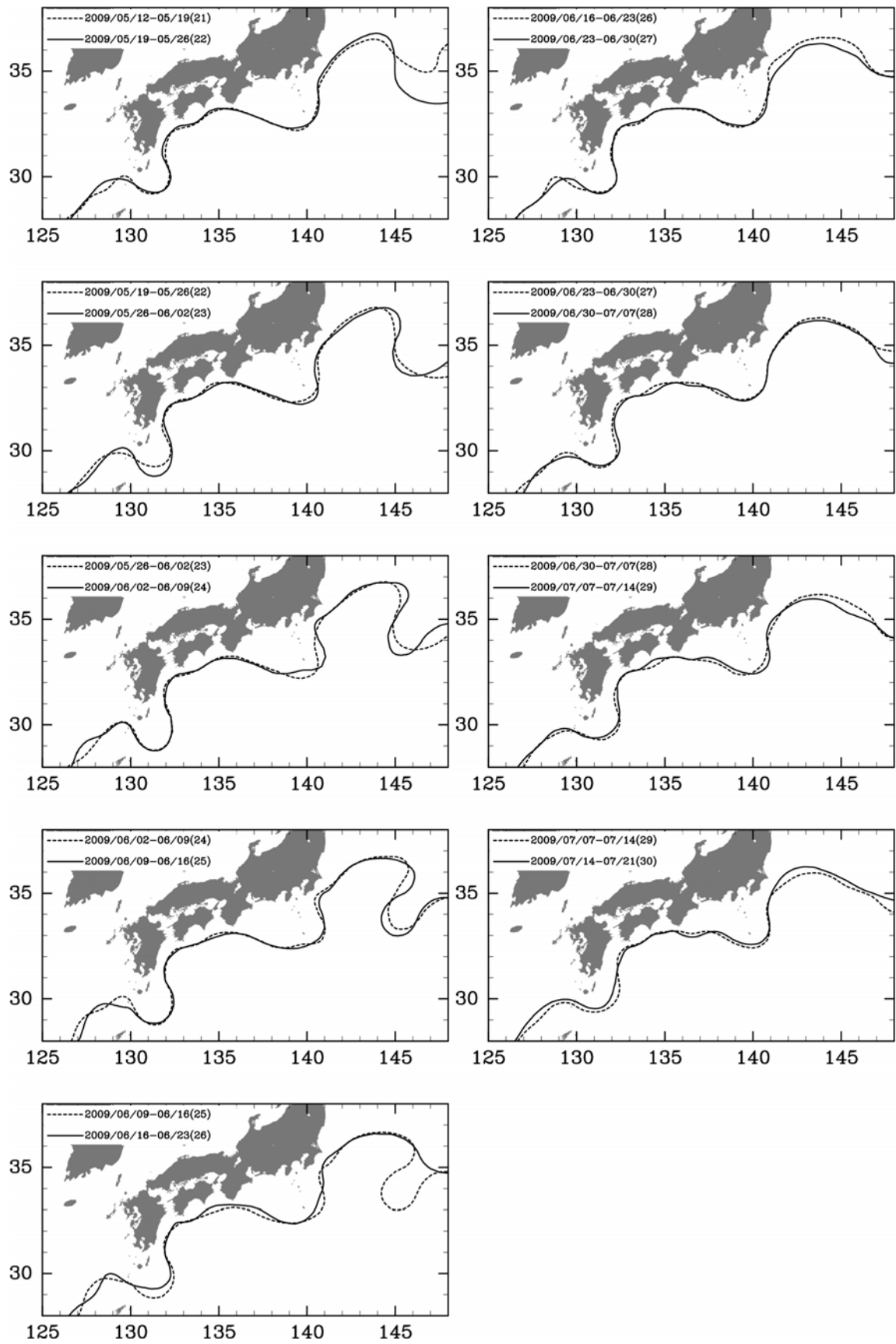


図 2b 黒潮流軸のパターン

(2009年3月~7月, 海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マサバおよびゴマサバ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し（2009（平成21）年8月～12月）

対象海域：薩南～豊後水道、紀伊水道外域、熊野灘、伊豆諸島周辺海域、犬吠～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい

対象魚群：0歳魚（2009（平成21）年級群）、1歳魚（2008（平成20）年級群）、2歳魚（2007（平成19）年級群）、3歳魚（2006（平成18）年級群）、4歳（2005（平成17）年級群）以上。魚体の大きさは尾叉長で表示。年初に加齢。

1. 薩南～豊後水道（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は薩南海域では前年を下回り、日向灘～豊後水道では上回る。1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は少ない。サバ類全体としては前年を下回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは混獲程度。ゴマサバが主な漁獲対象となる。薩南海域では30～36cm（1,2歳魚）主体。日向灘～豊後水道では30cm前後以下（0,1歳魚）主体に30cm以上（2歳魚）が混じる。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバは前年を上回る。ゴマサバ0歳魚は前年を上回る。1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は前年を下回る。サバ類全体としては前年を上回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは2歳魚が主体。ゴマサバが主な漁獲対象となり、30～37cm（2,1歳魚中心）が主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は前年並。1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は前年を下回る。サバ類全体としては前年並か上回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは混獲程度。ゴマサバが主な漁獲対象となり、31～33cm（2歳魚）が主体で30cm以下（1歳魚）や33cm以上（3歳以上）が混じる。期後半から28cm以下（0歳魚）も混じる。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

- (1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は前年を上回る。1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は前年を下回る。ゴマサバとしては前年を下回る。サバ類全体としては前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：ゴマサバは期を通じて三宅島周辺海域で漁獲される。
- (3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、29～34cm（2歳魚）が主体で26～28cm（1歳魚）や25cm以下（0歳魚）も漁獲される。

5. 犬吠～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバ0歳魚は前年を上回る。1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年並か下回る。4歳魚は前年を大きく下回る。5歳以上は前年を上回るが少ない。マサバとしては前年並か下回る。ゴマサバ0歳魚は前年を上回る。1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は前年を下回る。ゴマサバとしては前年並。サバ類全体としては前年並か下回る。
- (2) 漁期・漁場：定置網は期を通じて漁獲される。まき網はマサバ主体で、8月は三陸北部海域で漁場が形成される。9月は金華山周辺でも漁場が形成される。10月には三陸～常磐海域に漁場が広がる。11月は三陸～犬吠海域で主漁場は常磐以南となる。12月は常磐～犬吠海域に漁場が形成され、犬吠海域が主漁場となる。
- (3) 魚体：マサバは30～36cm（2歳魚）が主体となり、25～29cm（1歳魚）、35cm以上（3歳以上）も漁獲される。期後半に19～25cm（0歳魚）も漁獲される。ゴマサバは30～34cm（2歳魚）と26～30cm（1歳魚）主体にマサバに混獲される。

漁況の経過（2009年1～7月）および今後の見通し（2009年8～12月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年以降低い水準にあったが、加入豊度の高い2004年級群、2007年級群の発生により増加した。

2004年級以上（5歳以上）は、2004年級群の推定加入尾数が38億尾と高く、かつ過去の卓越年級群（1992年級、1996年級群）に比べて生き残りがよかったことから0歳～3歳時点まで漁獲の主体であったが残存資源尾数は少ない。

2005年級群（4歳魚）は、推定加入尾数が6.2億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は低いと判断され、資源量は少ない。

2006年級群（3歳魚）は推定加入尾数が3.3億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は低いと判断され、資源量は少ない。

2007年級群（2歳魚）は推定加入尾数が22億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査でも高い分布量が認められており、2004年級群に次ぐ豊度である。

2008年級群（1歳魚）は、推定加入尾数3.9億尾と、2006年級群は上回るものの豊度は低いと考えられる。茨城水試による2008年級群の未成魚越冬群指数は283と、最低値ではないものの2007年級群の1,727を大きく下回った。発生後の各調査船調査結果からも2008年級群の発生状況は、最低ではないものの高くないと判断される。

2009年級群は、現時点での再生産成功率の中央値（8.7尾/kg）から類推される2009年加入尾数は16億尾であり、2007年級群に次ぐ水準となる。中央水研による5月の移行域幼稚魚調査の加入量指数は5.8（本年より常用対数標記とした）と、2004年級群（5.6）を上回り、近年ではもっとも高い値であった。東北水研による6～7月の西部北太平洋サンマ資源調査の0歳魚現存尾数は26億尾（暫定値）と2008年級群が0歳であった前年（22億尾）並であったが、同調査の現存尾数および漁獲物の平均体長から推定される加入尾数は23億尾と2007年級群（22億尾）と同等の水準となる。茨城県沿岸への2009年級群の漁獲状況は前年を下回っているが、同県水試による調査船調査では分布が確認されている。北海道釧路水試による夏季道東沖における調査でも0歳魚が2007年級群とともに漁獲された。以上のことから現時点では再生産成功率の中央値から類推される加入量水準を引き下げる理由はないと考えるが、発生後間もない現時点での調査結果に基づく評価は極めて不確実である。

2) ゴマサバ

資源量は1990年代後半以降高い水準にある。2004年級群の高い加入豊度によって2005年にピークに達した後、2005、2006年級群の加入豊度が低いために減少してきているが依然高い水準にある。

2005年級群（4歳魚）は、加入尾数が6億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は低いと判断され、資源量は少ない。

2006年級群（3歳魚）は、加入尾数が4億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は低いと判断され、資源量は少ない。

2007年級群（2歳魚）は、前年7月時点では近年の平均的な水準（7億尾）と推定されていたが、その後の各地漁業で漁獲物の主体になり、また、冬季の調査船調査でも多く出現したことから近年の平均を上回る加入豊度であり、加入尾数は8億尾と推定される。

2008年級群（1歳魚）は、7月までの各地漁業の漁獲状況では、2007年級群の同期を大きく下回っている。静岡県棒受網CPUEによる加入量指数（静岡水技研）は14.2（6月までの暫定値）であり、2007年級群

(57.6) を下回り、2006 年級群並 (13.1) であった。調査船調査では、春季の稚幼魚期から夏秋季の索餌期、越冬期といずれも出現が少なかった。最近年のため推定値の不確実性が高いが、加入尾数は過去最低水準である 3 億尾と推定された。

2009 年級群 (0 歳魚) は、定置網などの各地漁業で漁獲され始めている。調査船調査では、移行域幼稚魚調査による加入量指数は 7.0 であり、過去同調査の 2006 年 (2.1)、2007 年 (6.1)、2008 年 (1.9) を大きく上回った。西部北太平洋サンマ資源調査による親潮～移行域における推定現存量は 164 億尾 (暫定値) であり、過去同調査の 2006 年 (0.1 億尾)、2007 年 (53 億尾)、2008 年 (21 億尾) を大きく上回った。また、同調査漁獲物による 7 月時点での推定平均体長は加入豊度と相関が高いが、2009 年は 18.6cm と過去最大レベルであった。これらの調査の資源量指標値から回帰式によって推定される加入尾数は 17 億尾 (暫定値) であり、加入量水準は近年の平均を上回ると見込まれる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態に記したとおり、0 歳魚 (2009 年級群) の加入量水準は、情報が限られており不確実ではあるが 2007 年級群並の高い水準を見込む。1 歳魚 (2008 年級群) の加入量は、2006 年級群は上回るものが高くはなく、予測期間における来遊量は多かった前年を下回る。2 歳魚 (2007 年級群) は加入量水準が高く、予測期間における来遊量は少なかった前年を上回り、漁獲の主体となる。3 歳 (2006 年級群) 以上は残存資源が少なく、2004 年級群に支えられて近年では多かった前年を下回る。

以上のことから本予測期間は 2007 年級群 (2 歳魚) が主体となり、これに 2008 年級群 (1 歳魚) および 2006 年級以上 (3 歳以上) が混じる。期後半には 2009 年級群 (0 歳魚) が漁獲されると考えられるが、現時点での 0 歳魚の加入量の見積もりは非常に不確実である。マサバ全体としては前年並か下回ると考えられる。伊豆諸島以西の海域では、サバ類に占める近年のマサバの割合は低い。

(2) 漁期・漁場

常磐海域から犬吠周辺におけるまき網による 1～6 月のサバ類水揚量は 35,488 トンと、前年同期 (60,636 トン) を下回った。千葉県以北沿岸の定置網による 1～6 月のマサバ水揚量は 1,946 トンと前年同期 (2,394 トン) を下回った。伊豆諸島海域における、たもすくい・棒受網漁業 (千葉県、神奈川県、静岡県船) の 1～6 月のマサバ水揚量は 1,088 トンと、前年同期 (709.5 トン) を上回った。静岡県および三重県のまき網によるマサバ水揚量は 2,536 トンと前年同期 (1,750 トン) を上回った。和歌山～宮崎県の 1～6 月のマサバ水揚量は 1,320 トンと前年同期 (1,733 トン) を下回った。

今漁期は、常磐海域以北ではまき網・定置網での漁獲が中心となる。7 月のまき網漁場は常磐～三陸南部海域にあり、三陸沿岸定置網への入網は順調に増えており、とくに北上の遅れはみられない。8～9 月は三陸北部海域を中心に漁場が形成され、漁場の移動は前年と同様の経過をたどると考えられる。なお、道東海域にも来遊すると考えられる (8 月中旬～9 月上旬)。

伊豆諸島以西の海域では近年低調な漁況が続いており、本予測期間に漁場形成があっても不安定で低調に推移すると考えられる。

(3) 魚体

常磐から犬吠周辺では、1～2 月は 20～25cm (モード 24cm) の 1 歳魚と 28～35cm (モード 30, 31cm) の 2 歳魚が漁獲された。3～4 月は主体が 28～35cm (2 歳魚主体、3 歳以上が混じり)、5 月は 24～30cm の 1 歳魚主体に 30～35cm の 2 歳魚が、6 月は 30cm 以上 (2 歳魚主体、モード 32cm) に 25～30cm (モード 26cm) の 1 歳魚が混じた。産卵場である伊豆諸島海域では 30～35cm (2 歳魚主体、モード 32, 33cm) 中心に、35～39cm (5 歳魚主体、モード 38cm) が混じた。駿河湾～熊野灘でもほぼ同様であった。6～7 月の三陸海

域定置網には30~40cm(2歳以上、モード35cm)の幅広い体長組成が認められている。

2009年6月までの年齢査定結果や尾叉長組成の推移などから、関東以北における本予測期間の年齢別尾叉長は、1歳魚:25~29cm、2歳魚:30~36cm、3歳以上:35cm以上と考えられ、期後半に出現する0歳魚は例年の傾向から19~25cmと予測される。年齢査定結果によると各年級群の尾叉長の範囲は広く重なり合っており、厳密な区分は困難である。

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、0歳魚(2009年級群)はこれまで得られている情報から近年の平均を上回る加入量水準とみられ、来遊量は多くの海域で前年を上回る。1歳魚(2008年級群)は過去最低水準の加入量と推定され、来遊量は前年を下回る。2歳魚(2007年級群)は前期までの漁獲の主対象となっており、近年の平均的な加入量水準を上回ると推定され、来遊量は前年を上回る。3歳魚(2006年級群)は前期までの漁獲も少なく、資源量水準は低いと推定され、来遊量は前年を下回る。4歳魚(2005年級群)は残存資源量が少なく、来遊量は前年を下回る。全体の来遊量は前年を下回る。

(2) 漁期・漁場、魚体

1~6月のゴマサバ漁況は前年あるいは平年を下回る海域が多かった。薩南海域では2歳魚を主体に3歳以上も多く、前年を上回り平年並であった。日向灘では2歳魚主体に前年を上回ったが平年を下回った。豊後水道は2歳魚主体に不漁の前年を上回ったが平年を大きく下回った。宿毛湾は前年、平年を下回った。紀伊水道は2歳魚主体に前年、平年を下回った。熊野灘は2歳魚と5歳魚(2004年級群)が主体で前年を上回った。伊豆諸島周辺海域では主に三宅島周辺海域が漁場で2歳魚主体に前年を大きく下回った。犬吠~常磐海域のまき網では2歳魚主体でマサバに混獲され、漁獲量は前年を下回った。

1~6月の漁獲量(全漁業)は、薩南海域~紀伊水道外域は15.6千トン(前年同期実績15.0千トン)、熊野灘~伊豆諸島周辺海域は20.3千トン(同27.3千トン)、犬吠以北海域は4.2千トン(同3.8千トン)であった(漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値)。

各地の漁期・漁場と魚体は、薩南海域では1,2歳魚が、日向灘~豊後水道では0,1歳魚が、紀伊水道~熊野灘では2,1歳魚がそれぞれ主体となって期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、近年の主漁場である三宅島周辺海域を中心に2歳魚主体で期を通じて漁場が形成される。犬吠以北海域では2,1歳魚主体にマサバに混獲される。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次の通りである。0歳魚(2009年級群):30cm以下、1歳魚(2008年級群):26~33cm、2歳魚(2007年級群):30~36cm、3歳(2006年級群)以上:33cm前後以上。

マアジ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2009(平成 21)年 8 月～12 月)

対象海域:北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業:まき網、定置網

対象魚群:0 歳魚(2009(平成 21)年級群)、1 歳魚(2008(平成 20)年級群)、2 歳魚(2007(平成 19)年級群)以上。年初に加齢。魚体は尾叉長。

1.北薩～土佐湾(まき網、定置網)

(1)来遊量:北薩～薩南海域では0 歳魚、1 歳魚とも前年を下回る。日向灘では0 歳魚主体で、不漁であった前年を上回る。豊後水道でも0 歳魚主体で、西側では前年並か前年を下回り、東側では前年を下回る。土佐湾では0 歳魚主体で、前年を下回る。

(2)魚体:19cm 以下の0 歳魚が主体で、20～25cm の1 歳魚も漁獲対象となる。

2.紀伊水道外域～熊野灘(まき網、定置網)

(1)来遊量:紀伊水道外域西部では0 歳魚、1 歳魚とも前年を下回り、東部では1 歳魚主体で前年を上回る。熊野灘では0 歳魚、1 歳魚とも前年を下回る。

(2)魚体:紀伊水道外域西部では19cm 以下の0 歳魚主体。紀伊水道外域東部では20～24cm の1 歳魚主体に25～28cm の2 歳魚が混じる。熊野灘では8～10 月は20～24cm の1 歳魚、11 月以降は14～18cm の0 歳魚が主体となる。

3.相模湾(定置網)

(1)来遊量:0 歳魚、1 歳魚とも前年を下回る。

(2)魚体:8 月は14～18cm の0 歳魚主体に20～24cm の1 歳魚が混じり、9 月以降は0 歳魚が主体となる。

漁況の経過(2009 年 1 月～7 月)および見通し(2009 年 8 月～12 月)についての説明

1.資源状態:

資源量は1986 年以降増加し、1990 年代半ばは15 万トンから16 万トンと高位水準で推移したが1997 年からは減少に転じ、2001 年に増加したものの2005 年以降は減少が続いている。現在の資源量は10 万トンを下回っており、水準としては中位、近年5 年間における動向は減少傾向にある。

2007 年級群(2 歳魚)は、今期において紀伊水道外域東部で漁獲対象となることが予測される。当該海域並びに全体として、今年1～6 月の漁獲尾数は前年の同齡魚を上回ったことから、漁獲の主体とはならないものの、引き続き漁獲対象になると考えられる。

2008 年級群(1 歳魚)は、今期において、紀伊水道外域東部で漁獲の主体となり、他の海域にも来遊が見られると考えられる。今年1～6 月の漁獲尾数は、相模湾では前年の同齡魚を上回ったが、その他の海域では下回り、近年5 年の同期と比しても低水準であった。これらのことから、年級群豊度として高くないことが推察される。

2009 年級群(0 歳魚)は、全体として、今期の漁獲の主体になると考えられる。加入量の指標と考えられる 4 月の九州南東沖における表層網調査(中央水研)による稚魚の分布密度は昨年を下回ったが、日向灘南部定置網への 0 歳魚の入網量(宮崎水試)は前年並であった。他の海域も含めて全体的に考えると、前期の漁獲状況からは、加入量水準は低いと推察される。

2.来遊量、漁期・漁場:

(1)北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、今期の漁獲の主体となる 0 歳魚は、6 月までの定置網やまき網への混獲状況から、前年を下回ると考えられる。また、1 歳魚についても、前期までの漁獲状況から前年を下回ると考えられる。

日向灘では、4～6 月における南部海域の定置網への 0 歳魚入網量が多かったことと、前年のような春季の日向灘沖での黒潮の安定的な接岸傾向での流去が今年は見られなかったことから、前者と正の相関関係にある下半期のまき網漁獲量(0 歳魚主体)も多いことが予測される。

豊後水道西側では、今期の漁獲の主体となる 0 歳魚の資源量水準は、定置網(標本船)への入網が前年よりも少なかったこと等から、前年の 0 歳魚と同等か下回ると考えられた。また、8～12 月においては、1 歳魚以上は散発的な漁獲で推移する傾向にある。以上のことから、今期の来遊水準は前年並か下回ると考えられる。東側では、愛媛県並びに周辺海域における 0 歳魚の水揚状況が低水準であったことから、今期も前年を下回ると考えられる。

宿毛湾～土佐湾では、1 歳魚は前期における中型まき網の漁獲の主体となり、今期も一定の来遊水準にあると推察されるものの、主体となる 0 歳魚は、前期の漁獲状況から前年を下回ると考えられる。

(2)紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、0 歳魚の加入量指数等から、来遊水準が低いと考えられる。1 歳魚は、前年(0 歳魚時)における標本漁協での下半期漁獲量が、前々年(前年の 1 歳魚の 0 歳魚時)のそれを下回っていたことから、来遊水準は前年の 1 歳魚を下回ると考えられる。

紀伊水道外域東部では、1 歳魚主体に、不漁であった前年を上回る来遊が期待できる。

熊野灘では、前期において中型まき網での 1～2 歳魚の漁獲状況は低調であった。1 歳魚は、1～6 月の漁獲量と 7～12 月の漁獲量に正の相関が見られるので、8 月以降も低調に推移すると考えられる。0 歳魚は、前期の定置網への入網が例年より遅れ、漁獲状況も低調であったことから、前年を下回ると考えられる。

(3)相模湾

7～12 月の漁獲量に高い正の相関が認められる 1～6 月の 0 歳魚の漁獲量が前年同期を大きく下回ったので、主体となる 0 歳魚の来遊量は前年を下回ると考えられる。また、1 歳魚は 5 月以降不振となっている。以上のことから、今期は前年を下回ると考えられる。

マイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2009(平成21)年8月～12月)

対象海域：北薩～三陸, 道東

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚(2009年級群)、1歳魚(2008年級群)、2歳魚(2007年級群)、3歳魚(2006年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量：紀伊水道以南海域では主に0歳魚を漁獲対象とし、前年並あるいはそれを下回る。熊野灘では0, 1歳魚を漁獲対象とし、前年並。

(2) 漁期・漁場：期を通じて。

(3) 魚体：12～18cmの0歳魚主体、一部1歳魚が混じる。

2. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：0歳魚については低調。駿河湾における1歳魚は前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて。0歳魚が主対象の伊勢・三河湾、相模湾では低調。1歳魚が主対象の駿河湾では散発的に漁場形成。

(3) 魚体：伊勢・三河湾, 相模湾においては体長16cm以下の0歳魚が主体。駿河湾においては17～22cmの1歳魚が主体。

3. 房総～三陸, 道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量：漁獲の主体となる1歳魚は前年を上回る。2歳魚以上は少ない。12月以降漁獲対象となる0歳魚は、現時点では不確定。

(2) 漁期・漁場：9月までは房総～常磐北部海域で1歳魚を対象に漁場が形成。10月以降の漁場形成はごく散発的。12月以降、常磐南部～房総海域で0歳魚がカタクチイワシに混獲。三陸～仙台湾の定置網では1歳魚主体で期を通じて漁獲。道東海域での漁場形成はない。

(3) 魚体：8月は18cm前後、9月は19cm前後の1歳魚主体。21cm以上の2, 3歳魚は少ない。12月以降漁獲対象となる0歳魚は12～13cm。

漁況の経過(2009年4～6月)および見通し(2009年8～12月)についての説明

1. 資源状態：

マイワシ太平洋系群の資源量は1994年に100万トンを下回り、その後1999年までは70万～90万トン台で推移したが、その後再び減少傾向となった。2003年は12万トン台まで減少した後、その後は10～13万トン前後で推移している。

2006年級群は、0～1歳魚時点で実施された諸調査船調査結果のいずれにおいても低豊度であることが示唆され、また実際の漁況においても低調に推移し、年級豊度自体が低いと判断される。

2007年級群は、2007年5月の移行域幼稚魚調査(中央水研)に基づく0歳時点での加入量指数が29.3と前年の2.5を大きく上回り、またそれに続く同年6～7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)による現存量推定値でも前年の0に対して5800万尾と大きな値を示すなど、0歳魚時点では好調な指標値が多くみられた。実際の漁況では、北薩～土佐湾海域における0歳魚の漁獲が前年を上回る好漁で推移した一方で、紀伊水道外域以東の海域では低水準の漁獲に留まった。同年級群が1歳となった後の2008年2月に実施された越冬期浮魚類現存量推定調査(中央水研)における1歳魚平均分布密度は0.016トン/平方kmと、2006年級群を対象とした前年同調査における0.013とほぼ同じ低い値に留まり、同じく2008年6～7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)では全く捕捉されず、9～10月の秋季北西太平洋浮魚資源調査(東北水研)ならびに6～9月に実施された表層流し網調査(釧路水試)でもマイワシの漁獲は皆無あるいはごくわずかに留まり、1歳魚時点での分布密度が低いことが示唆された。さらに、2008年から本年前期(4～6月)にかけての漁況経過も低調であったことから、今期の2歳魚としての資源量水準は2006年級群同様に低いものと推定された。

2008年級群の0歳魚時点での諸調査結果(5月移行域幼稚魚調査、6～7月北西太平洋サンマ資源調査、

6～7月表層流し網調査、9～10月秋季北西太平洋浮魚資源調査)は、9月に実施された表層流し網調査結果(釧路水試)を除いて、いずれも同年級群が低豊度であることを示唆しており、また実際の漁況においても、伊勢・三河湾、相模湾を除くいずれの海域においても低調に推移したことから、年級豊度としては依然低水準に留まると考えられていた。しかし、「未成魚越冬群指数(千葉水総研)」の推移をみると、2008年級群は1.46となり、このところ2年続けて1を割り込んだ2006、2007両年級群を上回り、近年では比較的高い年級豊度を示した2005年級群(1.73)を対象とした漁期を若干下回る値を示した。また2009年3～4月の熊野灘、同年4～6月の駿河湾、6月の常磐～房総海域における漁獲状況も好調に推移した。調査船調査においても、同年級群が1歳魚となった2009年6～7月に行われた北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)では、1歳魚以上のマイワシ推定現存量は3100万尾と、2004年以来となる千万尾単位の現存量推定値を得た。指標値によって多少ばらつきや動向の不一致はあるものの、2008年級群の今期1歳魚としての資源量水準は2006、2007両年級群を上回ると推定された。

2009年産卵期(前年10月～6月)の産卵量は約118兆粒で、前年同期の約81兆粒を上回った。2009年5月の移行域幼稚魚調査(中央水研)に基づく加入量指数は38.2で、前年の1.9を大きく上回った。また6～7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)による現存量推定値:484百万尾も前年同調査における82百万尾を一桁上回り、2002年調査以来の億尾単位での推定値が算出された。これらの結果から、現時点で得られている諸調査船調査の結果はいずれも0歳魚(2009年級群)の加入量水準が高いことを示唆している。しかしながら、2007・2008両年級群の0歳魚時点での評価でみられたように、0歳魚段階での調査船調査の結果が、必ずしもその後明らかになる年級豊度を正確に示しているとは言い切れない。また、紀伊水道以東の各海域における今漁期のマシラスの漁況は低迷し、相模湾以南海域における0歳魚の漁獲も極めて低調に推移している。今後、0歳魚としての漁獲状況、秋季北西太平洋浮魚資源調査(中央水研)、未成魚越冬群指数(千葉水総研)並びに越冬期浮魚類現存量推定調査(中央水研)等の結果に基づき年級豊度の判断を行う。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体:

(1) 北薩～熊野灘

来遊量:前期において、薩南海域～豊後水道両岸では0歳魚主体に低調で、1歳魚も少なかった。宿毛湾～土佐湾では、定置網(主に0歳魚主体)ならびに中型まき網(主に1歳魚主体)ともに前年の2倍強の漁獲がみられたが、定置網の漁獲量は、それでもなお過去10年(1998～2007)平均の7%に留まった。紀伊水道外域における漁獲対象は0歳魚であるが、前期は前年を下回るか(徳島県側)、あるいは前年を上回ったものの過去10年(1999～2008)平均の3割程度に留まる(和歌山県側)など、総じて低調に推移した。一方、熊野灘沿岸海域では定置網、中型まき網ともに1歳魚を主体として前年および過去10年(1999～2008)平均を上回る好調な漁獲で推移した。以上、各海域における前期の漁況ならびに各年級群の資源状態を総合すると、主に0歳魚を漁獲対象とする紀伊水道以南海域においては前年並あるいはそれを下回る来遊水準、一方熊野灘については、0、1歳魚双方を漁獲対象として、前年並の水準で推移すると考えられる。

漁期・漁場:今期を通じて漁場となる。

魚体:体長12～18cm程度の0歳魚が漁獲の主体となり、一部1歳魚が混じると予測される。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾

来遊量:前期の渥美外海、遠州灘～駿河湾、相模湾におけるマシラス漁況は、いずれも前年同期の漁獲量の2割(相模湾)、場所によっては1%以下(渥美外海、遠州灘～駿河湾)という極めて低調な漁獲に留まった。その後現在までの間、伊勢・三河湾ならびに相模湾の定置網にて0歳魚のヒラゴがカタクチに混じって若干漁獲されているが、量的には少ない。一方、1歳魚(2008年級群)は駿河湾～相模湾にてまき網や定置網により漁獲されたが、その量は前年および過去5年(2004～2008)平均を上回った。これらのことから、今漁期における0歳魚(2009年級群)の来遊は期待薄である。駿河湾においては1歳魚(2008年級群)の前年ならびに過去5年の平均を上回る来遊が予想される。

漁期・漁場:今期を通じて漁場となるが、前期におけるマシラス・ヒラゴなど0歳魚の漁獲量が極めて低く推移していることから、例年漁獲の主体が0歳魚である伊勢・三河湾ならびに相模湾における漁場形成は低調に推移すると考えられる。一方、1歳魚(2008年級群)が漁獲対象となる駿河湾では、年末まで散発的に漁場が形成されると考えられる。

魚体：伊勢・三河湾ならびに相模湾においては、体長16cm以下の0歳魚が漁獲の主体となる。駿河湾においては17～22cm程度の1歳魚が漁獲の主体となる。

(3)房総～三陸, 道東(まき網、定置網)

来遊量：前期の漁況は1歳魚(2008年級群)を主体として好調に推移し、特に5月中旬以降に常磐南部～房総海域に形成された漁場からの漁獲は、各県とも昨年同期の3～6倍に達し、2歳魚(2005年級)を主体として好漁のあった2007年漁期を除くと、2002年以降で最大の漁獲量を示した。常磐北部海域においても、6月にまき網によって1歳魚を主体に100トンを超える漁獲がみられたが、これもやはり2002年以後の出来事である。これらのことから、1歳魚(2008年級群)の今後の来遊量は2007年および2008年漁期を上回ることが予想される。2歳魚(2007年級群)および3歳魚(2006年級群)以上の年齢群については、年級豊度が低く、また残存資源量も少ない。これらのことから、今期の来遊量は、1歳魚を主体として前年を上回ると考えられる。12月以降漁獲対象となる0歳魚は、これまでの調査船調査結果などからみる限りでは例年よりも加入量水準が高いことも期待されるものの、「資源状態」のところで前述したように、調査船調査で捉えた0歳魚の豊度の指標が、その後の漁況ならびに後日判明する年級豊度と必ずしも一致しないこと、また紀伊水道以東海域におけるシラス漁況が低調であったこと、相模湾以南海域における0歳魚の漁獲が極めて低調に推移していること等を考えると、漁期後半に加入して来るであろう0歳魚の漁獲水準を現段階で予測することは難しい。

漁期・漁場：前期は5月以降常磐南部～房総海域にまき網漁場が形成された。また、常磐北部海域においても、6月にまき網による漁獲がみられた。最近年におけるまき網漁場形成の傾向から、9月までは房総～常磐北部海域で1歳魚を対象に漁場が形成される。10月以降の漁場形成はごく散発的に終わる。12月以降、常磐南部～房総海域において0歳魚がカタクチイワシに混獲される。また、三陸～仙台湾にかけての定置網においても1歳魚主体で期を通じて漁獲される。

道東海域については、本年6～7月に釧路水試が実施した流し網による漁獲試験において、釧路沖で100尾超の1歳魚(2008年級群)が漁獲された。2008年以前の同調査ではマイワシがまとまって漁獲されたことはなく、一調査あたり採集尾数も1994年以降で4番目に高い値となるなど、沖合に分布するマイワシ1歳魚の量は例年よりも多く、道東海域への来遊量は前年を上回ることが考えられる。ただし、ここ数年の道東海域におけるマイワシ漁獲量は数トン程度に留まっており、漁場を形成するには至らない。

魚体：前期は体長15～19cmの1歳魚が主体で、これに体長20cm以上(2歳魚以上)が5月に若干混じる程度であった。今期の1歳魚は、8月は18cm前後、9月は19cm前後になると予測される。21cm以上の2,3歳魚は少ないと考えられる。12月以降漁獲対象に加わる0歳魚は、過去の傾向から12～13cmで出現すると考えられる。

カタクチイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し (2009(平成21)年8月~12月)

対象海域：北薩~三陸、道東。

対象漁業：まき網、定置網、船曳網。

対象魚群：0歳魚(2009(平成21)年級群)、1歳魚(2008(平成20)年級群)、および2歳魚(2007(平成19)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩~常磐のシラス(船曳網)

(1) 来遊量：西薩~日向灘では前年を下回る。伊勢湾~渥美外海では好漁の前年並。遠州灘~駿河湾では前年を上回る。相模湾では前年並。鹿島灘~常磐海域では好漁の前年並か前年を下回る。

(2) 漁期：全期間。

2. 北薩~紀伊水道外域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩・薩南では前年を下回る。日向灘では不漁の前年を上回る。豊後水道(大分県側)で前年を下回る。豊後水道(愛媛県側)では不漁の前年を上回る。土佐湾から紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：10~12cmの1歳魚および9cm以下の0歳魚。

3. 伊勢・三河湾~相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：伊勢・三河湾~渥美外海では好漁の前年を下回る。駿河湾~相模湾では不漁の前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：全期間。

(3) 魚体：予測期間前半では10~13cmの1歳魚、予測期間後半では5~10cmの0歳魚主体。

4. 房総~三陸、道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量：不漁の前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：1 そうまき漁場は12月以降で常磐~犬吠埼周辺。道東のまき網は9~10月。仙台湾~三陸の定置網は全期間。常磐の小あぐり・房総沿岸の2 そうまきは全期間。

(3) 魚体：常磐・房総では0歳魚は8~12月に6~10cm台、1歳魚は12月に12~13cm台で漁獲される。三陸の定置では12cm前後の1歳魚主体。道東のまき網では11~13cm台の1歳魚と9~10cm台の0歳魚。

漁況の経過 (2009年4月~6月) および見通し (2009年8月~12月) についての説明

1. 資源状態：

カタクチイワシ太平洋系群の資源量推定値は1998年から2007年まで80万~150万トンで推移している。2007年の資源水準は過去30年で高位、動向は5年間で減少傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布している。

2007年級群は、2007年6~7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)における10cm未満の未成魚の分布量や0歳魚としての道東への来遊水準から、0歳魚としては高水準であった。しかし、その後各地の漁獲には繋がらず、2008年1~6月における常磐・房総海域においては2007年級群(1歳魚)が漁獲の主体となったものの、千葉県~福島県合計の漁獲量は7.3万トンで、1999年以降(21.4万~7.8万トン)で最低水準

の2000年並であった。この年級群は1歳魚の春季で体長12~13cm台に達しており、1歳魚としては大型で、成長が速く夏季の産卵後に死亡したと考えられ、1歳魚の夏秋季における道東への来遊もほとんど無く、今後も漁獲の対象とはならない。

2008年級群は、2008年9~10月の秋季北西太平洋浮魚資源調査(中央水研)では近年の中でも0歳魚としては高い水準であった。西日本においてはシラスから0歳魚まで概ね不漁であったが、伊勢・三河湾海域ではシラスが好調で、秋季も同群から成長したと考えられる未成魚・成魚が主体で好漁であった。0歳魚を主対象とする秋季の八戸の小あぐり、夏以降の九十九里海域の沿岸2そうまきも好漁で、12月初旬には常磐・房総の1そうまきでも0歳魚時点から漁獲され、熊野灘のまき網では1~4月までこの年級群が主体となり好漁となった。しかし常磐・房総海域(福島・茨城・千葉の3県計)での1~6月の漁獲量は前年を上回ったものの低調であり、現時点で高水準とは言えない。以上のことから現時点では、2008年級群は過去10年の中で中水準であると考えられる。

2009年級群に関しては、1~6月の本州太平洋岸における産卵量が5,863兆粒で、前年同期(3,834兆粒)を上回ったが過去10年同期の平均(7,385兆粒)を下回り、2001~2002年同期と同程度の水準であった。6月までのシラス漁況は全般に低調であったが、相模湾では4月以降、伊勢・三河湾~駿河湾では6月以降好漁に転じた。2009年6~7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)における10cm未満の未成魚の推定分布量は前年より高く、2004年および2005年と同程度で、同調査における推定現存量としては中程度の水準であった。以上の状況から、2009年級群は現時点の資源量としては過去10年の中で中~低水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体:

(1) 西薩~常磐のシラス(船曳網)

西薩・志布志では春漁(3~5月)が前年および過去5年平均を下回り、今後も来遊水準が低いと考えられる。日向灘では黒潮が離岸傾向との予測であり夏漁の海況としては悪いため、前年を下回ると考えられる。豊後水道および土佐湾では予測が困難である。伊勢湾及び渥美外海では内湾でのカタクチイワシの産卵水準が極めて高く、好漁の前年並と考えられる。遠州灘~駿河湾では6月以降漁況が好転していることから、今後も好漁となると予測される。相模湾では卵の分布量から前年並と推測される。鹿島灘~常磐南部では黒潮流路がC型・D型・N型の時に安定した漁となる傾向があり、海況の予測によればC型基調となることから、漁獲量としては中水準で好漁の前年並か前年を下回ると予測される。

(2) 北薩~紀伊水道外域(まき網、定置網)

北薩・薩南海域では、北薩海域のまき網が低調であることから、来遊水準は低いと考えられる。日向灘では、夏季の漁獲の主体となる10~11cm台の魚群は、春季に周辺海域で漁獲される8cm前後の魚群に由来すると考えられ、同群は6月までの漁況から少ないと推察されるため、不漁であった前年を上回るものの予測期間の来遊水準は低い。豊後水道(大分県側)では6月まで未成魚・成魚、シラス共に不漁で、予測期間中も漁況の上向く可能性が低い。豊後水道(愛媛県側)では6月まで12cm前後の大羽主体で好漁で産卵親魚が多く、不漁であった前年を上回ると考えられる。土佐湾から紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる

漁獲対象ではないため、まとまった漁獲は無い。

(3) 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

伊勢・三河湾および渥美外海では、春季に来遊した1歳魚(2008年級群)の漁獲が順調である一方で、5月までのシラスは極めて不漁で6月以降好転している。従って、予測期間中は1歳魚の漁獲は続くものの0歳魚は前年より少ない可能性があり、好漁であった前年を下回ると予測される。駿河湾～相模湾では上半期の漁況経過から低調であった前年を上回ると予測される。

(4) 房総～三陸、道東(まき網、定置網)

2009年1～6月における常磐・房総海域における漁況は低調であったものの、前年に引き続き、例年であれば1～2月に漁獲の主体となる2歳魚(2007年級群)がほとんど見られず、1歳魚(2008年級群)主体であったことから、現時点では2008年級群は近年の中で中水準にあると考えられる。2007年級群は、前年の5～7月において既に体長12～13cm台に達しており1歳魚としては大型で、夏季の産卵後に死亡し2歳魚としての漁獲に繋がらなかった。一方2008年級群は、本年6月までの常磐・房総の1そうまき・2そうまきにおいて10～11cm台主体で漁獲され、本年5～7月の調査(東北水研および釧路水試)において12～13cm台の群が目立つものの10～11cm台の群も出現しているため、秋季の道東および冬季の常磐・房総海域への来遊がある程度見込まれる。

釧路水試により実施された道東～三陸沖太平洋における流し網調査(6月24日～7月2日、北辰丸)では、CPUEが1433尾/回で、前年の6.3尾/回を大きく上回り、1994年以降で7番目に高かった。魚体は9.5～15.0cmで、13cm前後が主体であった。6～7月時点で13cm前後まで成長した大型魚は夏季の産卵後に死亡し漁獲に繋がらないと考えられるが、秋季の漁獲に繋がる10～11cmの魚体も出現していることから、秋季の道東への来遊は低水準であった前年を上回ると考えられる。

常磐・房総海域の1そうまきは例年、12月以降の南下期から盛漁期となる。秋季に道東へ来遊した群が12～13cm台の大型群となって来遊することが見込まれる一方で、春シラスが不漁であることから0歳魚(2009年級群)の加入が悪い可能性がある。しかし例年、冬季は12～13cm台の大型群が漁獲の主対象であるため、不漁の前年を上回ると考えられる。ただし、夏秋季の常磐の小あぐり、房総沿岸の2そうまきは0歳魚(2009年級群)が漁獲の主体となるため、前年を下回ると考えられる。

常磐・房総海域における1そうまきの主漁場は、1～2月は常磐南部から房総、3～4月は犬吠埼以南、5～6月は常磐南部から房総に形成された。近年の推移から、1そうまきの漁場は8月以降同海域では形成されず、南下期は12月以降に常磐から犬吠埼周辺に形成されると考えられる。

宮城県における4～6月までの漁獲量は、定置網を主体に3,148トンで前年同期の127%であった。体長組成のモードは5～6月で11.0cmと12.0cmであった。三陸沿岸定置網は、各年級群の資源状況から中漁程度であった前年並と考えられる。

ウルメイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2009(平成 21)年 8 月～12 月)

対象海域:北薩～熊野灘

対象漁業:まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群:0 歳魚(2008 年秋～2009 年生まれ)及び 1 歳魚(2008 年夏以前生まれ)。魚体は被鱗体長。

(1) 来遊量:北薩及び薩南海域では 8～9 月は前年・過去 5 年平均を上回る。10 月以降は前年・過去 5 年平均並になる。日向灘では前年を上回る。豊後水道南部では前年を上回る。土佐湾では前年並～下回る。紀伊水道外域西部では前年を上回り、東部では前年及び過去 10 年平均を下回る。熊野灘では前年を上回る。

(2) 漁期:土佐湾の多鈎釣は 11 月から。他は全期間。

(3) 魚体:7～17cm の 0 歳魚が主体。20 cm 台の 1 歳魚は散発的だが、熊野灘では 8 月は 20～23cm の 1 歳魚も主対象となる。

漁況の経過(2009 年 1～7 月)および見通し(2009 年 8～12 月)についての説明

1.資源状態:

産卵量(紀伊水道外域～日向灘、前年 9 月～8 月)・漁獲量(暦年)から判断して、資源水準は高位であり、最近 5 年の推移から増加傾向と推定されたが、2008 年においてはともに減少した。2009 年産卵期においては、2008 年産卵期を上回る産卵量と推定された。

2.来遊量、漁期・漁場:

全体として、今期は 0 歳魚主体の漁況になると予測され、前期の漁況等から 0 歳魚の加入状況を判断した。1 歳魚は全体として散発的に漁獲されるが、熊野灘では 8 月に 0 歳魚とともに主対象になると予測された。

北薩～薩南海域では、前期において北薩海域の棒受網が好調であったことから、8～9 月は 0 歳魚主体に前年・平年を上回ると考えられる。10 月以降は太平洋系群の加入状況と海況条件に左右されることから現状での判断は難しいが、全体として、前年・平年並みになると考えられる。

日向灘では、1～6 月に採集された稚仔の量、4～6 月の日向灘南部大型定置網の当歳魚推定漁獲量は前年並であるが、ウルメシラスは前年を上回った。また、日向灘におけるまき網の漁獲量は低調であった前年を上回った。以上のことから、0 歳魚の加入状況は前年を上回っていると推定された。また、前年漁獲量から回帰式により算出される予測漁獲量から見ても、前年を上回ると推定される。

豊後水道南部西側では、5～6 月のまき網漁獲量(0 歳魚主体)が前年を大幅に上回り、定置網(標本船)への入網も前年を上回った。東側でも、前期の水揚げが好調で、前年の 0 歳魚を上回ると考えられた。以上のことから、今期の来遊水準は前年を上回ると考えられる。

土佐湾では定置網入網調査等による 0 歳魚の加入状況等から、前年並～下回ると考えられる。

紀伊水道外域西部では、6月にまとまった漁獲が見られたこと等から、来遊水準が好転してきたと考えられ、前年を上回ると予測される。東部では、前期の漁況から0歳魚の加入は前年並で過去10年平均を下回っていると考えられた。このことから、前年及び過去10年平均を下回ると考えられる。

熊野灘では、春季の熊野灘沿岸定置網における0歳魚の漁獲量は前年同期を大幅に上回り、まき網では1歳魚及び少数ながら大型の2歳魚も順調に漁獲されていることから、資源状態は比較的良好で、少なくとも前年以上の来遊は見込めると予想される。

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	三重県水産研究所
北海道立函館水産試験場	和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究所
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター 栽培資源研究所
福島県水産試験場	大分県農林水産研究センター 水産試験場
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	大阪府環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
東京都島しょ農林水産総合センター 大島事業所 八丈事業所	香川県水産試験場
神奈川県水産技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
神奈川県水産技術センター 相模湾試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課 資源管理部 管理課
静岡県水産技術研究所	独立行政法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所 中央水産研究所
静岡県水産技術研究所 伊豆分場	
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	